

新中国の女性

三月十八日国務院の虐殺事件が起こってから、日本語の『北京週報』にすこぶる詳しい記述が載った。所によっては中国の御用新聞記者よりもまだ公平である。というのは彼らは群衆が「何丁かのピストル」を持っていたというのを信じていない。Stickを持った人がいたとは言っているけれども。彼らは皆すこぶる中国の女性の大胆さと落ち着きに敬服している。明観生は「恐るべき刹那」の附記の中で次のようなことを言っている。

「此騒ぎの中で一番感じたことは、支那の女学生の強いことである。凡べての示威運動には、女学生が先頭になるが、其行動は却々機敏大胆で、男学生も及ばない。此日も女学生は盛んに働いた。私の直ぐ前にも一人の女学生が居て、鉄砲に打たれたが其女学生は例の長い毛糸の襟巻きで流るる血潮をキュッと押へながら、健気な態度をして居たのはあの恐ろしい中でさへ私に感心させた。この分では支那は女によつて起るぞと思はせた位であつた。」ⁱ

『北京週報』の社長の藤原君も社説の中で言及しているが、同じような意見である。

「当日親しく其場に出会して、此実況を目睹した友人の談に據れば、最も感心したことは、女学生等の勇敢である。彼の恐ろしい悲劇の中にあつて、女学生達は或は死し、或は傷つき、男子さへも耐へぬ中に於て実に其立派な態度を失はなかつた。支那は女から起こる国ではあるまいかと思はれた程であると。此前、久しく支那から離れて二十年振りて来た支那学者の老先生は支那の若い婦人達の顔が、前清時代の其等に比して実に見違えた精気を放つて居るのに驚く、これでは支那は興隆するに定つてゐると語つた言葉と照合して、其処に確かに支那の機運の或物を示して居るではないかと思ふ。」ⁱⁱ

われわれは佩弦君の「執政府大屠殺記」を読んで、彼が次のように言うのを見る。

「わたしはほんとうに役立たずで、門を出ると、走りながら、ただぜいぜい息をするだけだった。後ろに二人の女学生がいたが、一人にはわたしは本当に感服した。彼女は笑みを浮かべながらその連れに言った、“彼らも中国人だわよ！”これはわたしを恥じさせた！」ⁱⁱⁱ

この事と楊徳羣さんが友人を助けようとして難に遭つた事実を合わせて見ると、われわれは日本の記者の感想は確かであつて、決して全部が異国趣味のロマンティックな感激から出たものではないと信じることができる。しかしこの現象も当然なのである。様々な方面から見て、女性の革命事業に対する覚悟と推進は必ず男性より早く、より熱烈で断乎としているはずである、なぜなら彼女たちがこれまで身に受けた圧迫もより大きいししかもより長いからである。ポーランド、ロシア及び朝鮮の革命史上女性が大きな位置を占めることは、みんな大抵知っている。中国は後進だけれども、自ずとひとりだけ違うわけにはいかない。わたしは決して男性を抹殺して、彼らは救国の責めを負う資格がないと考えようとは思わないが、彼らにあまり生気がなく、あまり落ち着きと堅忍さがないことは、とても否認することはできない。わたしはまた決して日本の記者のように女性の力がすなわち中国を救うとは考えないが、中国革命がもし成功するなら、女性の力は必ずやその大半を占めるであろうことを確信する。革命思想を持つ男性はたやすく母や妻に引き止められるが、革命思想を持つ女性は自分から救国できるだけでなく、革命家の妻や、

革命家の母になることができる。これが彼女たちの力のあるところである。

男女の思想恋の変化は生の選択ととても関係があるが、今はいずれも男性を主とする。将来もし女性が「風雅の盟主」（Elegantiae Arbitrator）になれば、両性の問題は強調できるばかりか、一切が良くなるだろう。（ストープス女史の主張もその中の一部分である。）今は他のことは措くとして、中国革命に関することだけを述べよう。われわれの盟主はどのような人間でなければならないか。これは断乎として、書齋に逃げ込んで『甲寅』を読んでいるような聡明なお嬢さんではなく、また必ずしも男装して従軍した木蘭のような人物でもない。わたしはここでふとポーランドの詩を思い出した。この詩はブランデス（Georg Brandes）が著した『十九世紀ポーランド文学論』^{iv}に載っていて、有名な復讐詩人ミキエヴィッチ（Adam Mickiewicz）が作ったもので、題を「ポーランドの母に」と言い、詩人の理想の国民の母を表したものである。われわれはしばらく彼がどのような言い方をしているか見てみよう。大意は次のよう。

「早く君の息子を冷たくて人気のない洞窟に連れて行き、葦の上で眠らせ、湿った汚い空気を呼吸させ、毒虫と一緒に暮させよ。そこで、彼はどのようにすれば自分の忿怒を潜ませ、自分の思想を測らせず、黙って自分の言葉を死なせ、卑屈に自分の姿を蝮のようにするかを学ぶだろう。われわれの救い主は子どもの頃、ナザレで遊び、十字架を持ったが、後になって彼はその上で世界を救った。ポーランドの母よ！もしわたしが君だったら、わたしは彼の未来の運命のおもちゃで彼を遊ばせよう。早く鎖をその手につけて、犯罪者の汚い小車を押すことに慣れさせ、首斬り役人の斧鉞をみても顔色を変えず、縛り首の縄をみても顔を赤くしないようにさせるのだ。なぜならば彼は決して昔の武士のようにエルサレムにゆき十字軍になり、彼の旗を征服された城の上に立てるのではないし、また三色旗の下の子兵士のように自由の田畑を耕して、己の鮮血で肥やすのでもないからだ。いや、無名のスパイが彼を告発すれば、彼は偽の誓いをした裁判官の前で彼自身を弁護しなければならぬだろう。彼の戦場は地下の牢獄であり、抗いがたい敵は彼の裁判官である。絞首の枯木がすなわち彼の墓標となり、何人かの女の涙は、まもなく乾くだろう。そして国民の夜の長話が、彼の死後の唯一の荣誉と記念である。」

これがポーランドの賢母である。しかし良妻はどうあるべきか？同じ詩人が『グラシーナ』（Gracyna）で言うところによれば、彼女は夫の命令に背くことができるし、生命・家族・領地を犠牲にして、少しも顧慮愛惜しない、ただ祖国の光栄を保ち、敵に損害を与えることさえできれば。ああ、ポーランドの復讐詩人たち、ミキエヴィッチとスロヴァッキ、君たちの炎のような情熱は永遠に不滅である、この世界にまだ圧迫と暴虐があるかぎりには。君たちの理想の女性はあるいは誠にいさか過激であるかもしれない。だがポーランドではおそらくこうでなければいけなかったのだろう。そしてこうでなければポーランドはやはり存在し中興に至ることはできなかつたかもしれない。中国の今の状況はポーランドより少しは良いようだ、（だがわたしも保証はできない、今のように「学風を整頓」して行けば、たちまちそういう所にゆくだろう。）というのはブランデスが『ポーランド印象記』第二巻^vに言うように、「政府は学校で女子にポーランド文を読むことを禁止し、ただ裁縫を教えることだけを許可する。だから彼女たちは石板の上にそれぞれ一つブラジャーの絵を描いて、警察の臨検を防ぎ、机に裁縫の材料を並べて、書籍は下に

置く」が、中国ではまだなんとか彼女たちに本を読ませているのだから。そのためわたしは中国の女性に対してまだ彼女らがポーランド式の良妻賢母になるよう希望するところまでは行っていないと思う。ただ彼女がわれわれを導き、われわれを刺激できるようになることを希望する。それは決してもっぱら報復することではなく、われわれに如何にして真つ当に愛し死ぬかを教えるのである。

わたしは中国の新しい婦人あるいは古い婦人の愛情が猛烈かそれとも冷淡なのかは知らない。だが中国の男子は大抵が恋愛と生死に対して大きな理解と修養を持っているとは思えず、女性の影響が薄弱無用なことがわかる。今現在の中国に生きる女性は大胆にして落ち着いた態度で自分の恋愛と死を処理するだけでなく、また同様の態度で導く——いや、いっそ男子を誘惑あるいは蠱惑して同じ道を行けと言おう、そして恋愛と死とを互いに完成させるのだ。これにはどのようにすべきかは、彼女たち自身が知っているだろう。われわれは言うことができない。わたしはこうした希望を表明することができるだけだ。琴を弾き絵を描き詩を吟じ刺繍をするお嬢さんたちは、もともとはよいのだろうが、だがそれはちょうど薄紅色の花瓶のように天下泰平の時代の装飾品であり、わたしは決してそれを叩き割ろうと思わないが、今の中国のような落ちぶれた家に不釣り合いなものである。だからわたしは称揚しようとは思わない。およそ二十年前、劉申叔先生がちょうど東京で『天義報』をやっていたとき、わたしは三首の偶成の詩を作って、彼に送って発表した。今でもまだ覚えているので、ここに転録して、“詩ありて証と為す”ということにしよう。

新生を求めんと欲するが為に、辛苦して此に奔走す、——
学び得たり羹湯を調えるを、帰来して新婦と作る。」
宛委の書を読まず、但だ鴛鴦の錦を織る、
錦を織りて長きこと一丈、春華此の中に尽く。」
門を出るに大願を懐く、事竟うるも一映〔声〕あげず、
欵欵として庸軌に墜ち、芳徽永く断絶す。

民国十五年大虐殺の月の末日、北京にて書して殺傷されし諸女士の記念となす。

※初出：1926年4月5日『語絲』第73期

i 『北京週報』1926年3月21日201号 明観生記事「恐ろしかった其刹那」。

ii 『北京週報』藤原鎌兄社説 『北京週報』201号巻頭言。また小島麗逸編『革命揺籃期の北京』（社会思想社1974年10月）p.201にも見える。

iii 佩弦「執政府大屠殺記」 『語絲』第72期1926年3月29日に掲載、佩弦は朱自清の筆名。記事は「自清」の署名で載った。

iv, v ブランデス『ポーランド印象記』Impressions of Poland

『十九世紀ポーランド文学論』は『ポーランド印象記』の一章The Romantic Literature of Poland in The Nineteenth Century(1886)として同書に収められる。「ポーランドの母に」は

p. 241~2 にみえる。また女生徒へのポーランド語教育の禁止は同書第二巻 The Polish Women, p. 55 に見える。

for him. This is the "note" of Mickiewicz's celebrated poem, *To the Polish Mother*: "Take thy son in time into a solitary cave, teach him to sleep on rushes, to breathe the damp and vitiated air, and to share his couch with poisonous vermin. There he will learn to make his wrath subterranean, his thought unfathomable, and quietly to poison his words, and give his being the humble aspect of the serpent. Our Redeemer, as a child, played in Nazareth with the cross on which He saved the world. O Polish mother! In thy place I would give to thy son the toys of his future to play with. Give him early chains on his hands, accustom

242

IMPRESSIONS OF POLAND

him to push the convict's dirty wheelbarrow, so that he shall not grow pale before the executioner's axe, nor blush at the sight of the halter. For he will not go on a crusade to Jerusalem, like the olden knights, and plant his banner in the conquered city, nor will he, like the soldier of the tri-colour, be able to plough the field of freedom and water it with his blood. No! an unknown spy will accuse him; he must defend himself before a perjured court; his battlefield will be a dungeon underground, and an all-powerful enemy his judge. The blasted wood of the gallows will be the monument on his grave; a few woman's tears, soon dried, and the long talks of his countrymen in the night-time, will be his sole honour and memorial after death."